

『浪花聞書』 『新撰大坂詞大全』 の語彙

鎌 田 良 二

一

江戸期の方言の書『浪花聞書』（文政二年・一八一九）『新撰大坂詞大全』（天保十二年・一八四二）の語彙についてそれが現在どのような形（語形・意味の変化など）で残っているかをみる。

まず、『日本古典全集』の東条操氏「浪花方言解題」を引用する。

原本は帝国図書館所蔵本では表紙とも墨付三十枚の半紙本である。一丁に十行づつ認めてあるが、註は本文の一行を二行に割書してあるから、註で数へれば一丁、二十行である。

著作年代を示す奥書やうのものは全くないが、「て」の部の「てうさやようさや」の条に「今年文政二年の春」と云う言葉が見えるから、その頃起稿したものと思ふ。外には丙寅（文化三）と丙子（文化十三）兩年の記事が散見してゐる。

著者は全く不明であるが恐くは江戸者らしく少くも大阪の人ではない。之は内題の『浪花聞書』と云ふ書名からも推察されるし、所々に「尚可尋」と記してゐる記述振でも分る。材料としては「物類称呼」の引用も見えるが、全篇を通じて焉哥話（略して哥話又は歌話とも）と云ふ書が多くとつてある。この焉哥話は私の未見の書であるが江戸と上方との言葉比べた方言集らしく思はれる。之は今後は是非、発見したい本である。

本書の内容は天保十五年版の『新撰大坂詞大全』と同じく伊呂波分の方言集であるが、記述の体裁は全く違ふ。「大全」は大坂者の作であらう。各語の註は極めて簡單で、かつ之は卑語、隠語を主としてゐるらしい。然るに「浪花方言」は大坂詞を借りて大阪を江戸人に語ると云ふ態度で風俗習慣などの細かな記述がある。甚しきは「し」の部、「新町」の条などは細註三十四行に及んでゐる。方言の記載にしても一々、江戸言葉の対訳を示し注意はかなり細かなところまで行き届いてゐる。音の長短、清濁の相違、同形異義語などについても沢山の面白い例が書中に見えてゐる。助数詞のやうなもの相違もよく氣をつけてその相違を示してある。

本書によれば当時の大阪の言葉を知ると同時に、之に対する江戸の言葉を知り得ると云ふ益がある（時には東京言葉の対照もある）。その上に大阪の風俗と江戸の風俗の相違などを、かなりハッキリと知る事が出来る。風俗史料としてもかなりの価値をもつものである。

単に言語の資料と云ふ側だけから眺めても色々な材料が含まれてゐる。「奥様」「お家さん」「お内義」「かみさん」「おかみさん」など云ふ言葉の使ひ方の相違も面白いし、「なます」が新町言葉と云ふ事は当然としても「おます」が遊里の

言葉から出たと言ふ註は注意に値する。

「ききな」「見な」の江戸・大坂の意味の相違などは文法上の興味がある。

方言としては極めて出色なもので、写本である為に今まで広く世に知られて居なかつたのは惜しいものである。

と、両書にはこのような違いがある。「浪花聞書」(以下、「浪」と略す)の採録語数は六六九語。「新撰大坂詞大全」(以下、「大」と略す)は四二七語である。

ここに記されたようなことから採録語の内容にもかなりの差があり、両書に共通している語は次の二十語にすぎない。

両書に採録された方言形を片仮名で示す。()内はその意味。方言形・意味とも上下二つ記した場合、上が「浪」、下が「大」であることを示す。すべて現代仮名づかいに改めた。意味では両書に記されたままではなく、もとの意から私の方で記したものが多し。例えば、ドクマ(悪たへにいふ言葉、江戸で云あたま)は「悪い意味での頭」とした。

両書、共通記載の語

ハシリモト・ハシリ(流しもと・水ながし)・ホデ(悪たいにいう手・手)・ホタエル(冗談で狂う・狂う)・ドクマ(悪い意味での頭(卑))・浪」||ド「大」(発語)ど氣遣い・ど盜

人・どしつこい・ガキ」大人同士あくたいにいう・子ども）・ヨナキ（夜商いするもの・夜そばを売る・夜商人）・ヨタンボ（生酔いによつばらい・酒の酔い）・ゾメキ（そそり・まことならぬ）・ナンバンニ（魚類・ねぎを入れてたいもの・ねぶかにて焚いたもの）・オヤマ（遊女・女郎）・ゲンサイ（女をさしていう・女）・ケツタイ・ケタイナ（忌々しい・いまいましい）・コマス（何々してやる・ことばの止めに言うーして、こます、見てこます）・アカン（つまらぬ・埒のあかんこと）・キリアイ（二人乃至大勢にても出し合て食ひもの何なりと趣向する・手銭出し）・メロ（あま・女）・ジュンサイ（ちよちよら云・内またこう薬、しつかりとせん人）・モミナイ・モムナイ（モムナイとも、うまくない・良うない）・スイ（通）³ 気のきいたこと、物に馴れたこと）

両書とも、いろは順であるので本稿もこの順で記すことにする。

『浪』は、先の東条氏の文にもある通り、一語につき註は二行で記す。註の記し方は、「隠元豆」は、「江戸で藤豆といふ」のように江戸言葉をも記したものが多く、「大」は、一語に對し註は一行のものが多く、「いれるとは、酒を呑むこと」のよ

うに「——とは」の下に「——のこと」と記してある。

本稿、『浪花聞書』は『古典文学全集』、『新撰大阪詞大全』は『国語学大系』による。

なお、先にあげた東条氏の「解題」では、『新撰大阪詞大全』のように「大阪」となっている、『国語学大系』で「大阪」となっているが、ここでは「大坂」とする。

二

両書に記された語彙について気付いたことを記す。

『浪花聞書』は、先の東条氏の文にある通り江戸人の見た江戸言葉との比較によつて大阪弁の特徴をとらえたものである。片仮名は「浪」にある方言形。（ ）は「浪」の意味、註で

あるがそれをもとにして本稿で漢字などに直したものが多く。また、片仮名も現代かなづかいに直した。「をとつい（一昨日）」も「おやじ（夫）」も「オ」とした。同様に「え」「ゑ」は「エ」とするなど。拗音・促音表記も。平仮名の方言形は現在の例。

音韻

○グワンジ(丸菓)・クワシン(菓子)・クワンス(籬子)がある。クワの音は私が昭和六十年、兵庫県相生市で明治四十年生まれの人から聞いたもので、くわし(菓子)、すいくわ(西瓜)、けんくわ(喧嘩)など。昭和六十三年姫路市で明治四十三年・四十四年生まれの人、ともに菓子はクワとなるが西瓜・喧嘩はカと聞かれた。(一四八ページの図参照)

○長音化 コウ(子)と記してあるがコの長音とみる。一音節語を二音節にのぼすことは古くからのものであり現在もそうであるが「浪」に記されているものは少なく「手」はホデの形で出ていて長音化のものは見えない。

○S—h音交替 ヒチ(七)がある。大阪弁はSh変化が多い。「様——さん」が「はん」「それ」が「ほれ」など。ほかにも、ヘキル(仕切る)が出ている。

○母音交替 ヒラウ(捨)へo—a)・ホーケ(箒)・ケツネ(爪)・オーケ(大)へi—e)が出ているが、ほかにイノク(動く)があるへu—i)へr—n)である。

文法

○キリモノ(着物)・シリンカ(知らんか)。現在もそうであるが、大阪弁は連用形の用法が広い。もとは大阪の遊里語であつたといわれる連用形命令法がある。「はよ、行キ(早く、行け)」「詫ミ(詫め)」「はよ、シー(早くせよ、しろ)など。

「着る」の一段活用動詞は現在もそうであるがラ行五段化する傾向がある。「着ラヘン(着ない)」「着ロウ(着よう)」その連用形の命令法「着リ」は今のところ少ないが、この着リモンも同様の連用形のものと考えられる。シリンカ(知らないか)も連用形を用いたのだろう。次の項で記す兵庫県豊岡市では「キロモン」の形があるという。(以上の片かなは一般に多い形)

○聞キナ(聞くな・禁止)・見ナ(見るな)・シイナ(するな)・シヨマイ(するまい・打消意志)・行キンカ(行きなさい・勧誘・命令)・言イナエ(言うな・禁止)

現在のアクセントで言えば、聞キナ・見ナで、聞キナ・見イナとナが高くなれば「聞きなさいよ・見なさいよ」の説得・懇願の意になる。コレナ(これさ)もある。禁止の「見ナ・シイナ」は「る」の脱落でもありこれも連用形の用法とみる。「行キンカ」も同様。また、知リンカ(知らないか)も出ている。「連用形+否定+疑問」という点では同じだが、行キンカは「行け」。知リンカは「知らないのか」である。

○シヨル(しおる・来おるを来よる) 継続態のヨルが出てゐる。継続態の意味・用法もたぶん現在と同じと思うが、卑下の意味があるかないかはこの註だけではわからない。

○シヤツタ・シヤル(出やしやつた・来やしやるなど蔭にてもあがめ言葉。江戸の出さした、来さしやるなり)「あがめ言う」とあるようにヤル敬語である。

○何ジャアロウト(何であろうと)・何ジャ知ラン(何だかららん)・何ボジャ(物の価を問う)・ナンボジャ(いくらだ)・ナンジャカジャ(何やかや)・指定(断定) 助動詞はすべてジャであることを示す。ただ、註の方の「何ジャシラン」の方は(何だかしらん)と「だ」であるが、「ナンジャカジャ」は(何やかや)と「や」になっているのが少し気になる。

○借ツテクル(物をかりてくるなり) 註の方で江戸では「借りて」で大阪は「借って」であることを示す。

語彙

音韻・文法では現在に通じるものが多いが、語彙面では現在使わなくなっているものが出てゐる。

○ゴリヨウニン(娘)・ゲンサイ(女・美女・女は髪黒きによりて玄妻)・母ジャ人(母)・この中、ゴリヨウサン(娘

さん)は現在も大阪の一部では使っているのだろう。ゲンサイ(妻)は昭和六十年相生市で「意中の女」の意味で使っていた(明治四十年生まれの人)と言っていた。母ジャ人については昭和三十年兵庫赤穂市では古いことばとして存在していた。

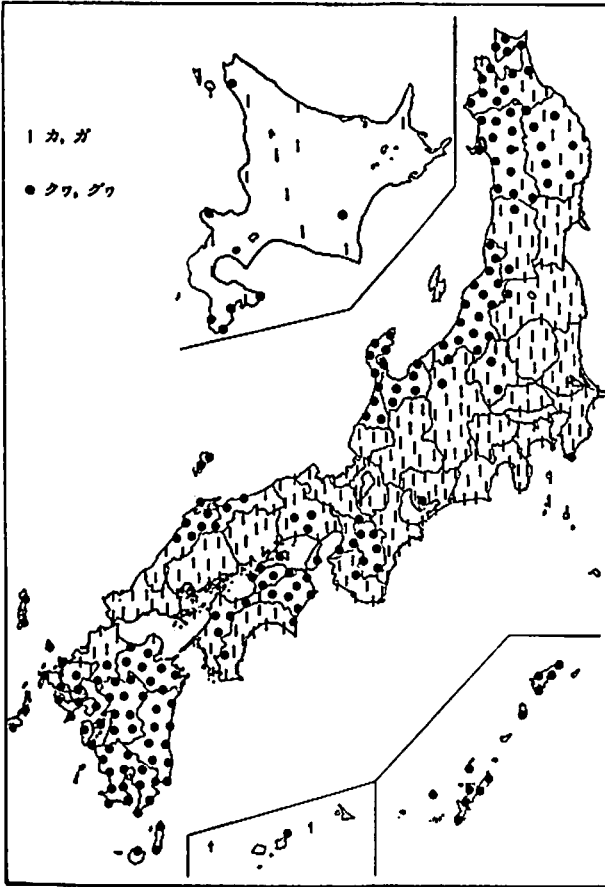
○隠元豆(江戸にて藤豆) 一般的に仮名書きが多いがこれは漢字・食物名は関東・関西で異なることが多い。ウウ(うなぎ)の形は最近まで聞いたことがある。

○スモジ(酢)「もじことば」の残りだが現在では殆ど使われていないだろう。

○ネキ(傍)・グチ(果物など皮共食うをかわぐちと云) ネキについて近畿周辺域の福井・敦賀・洲本の三市の中学生について調査した。福井市は男女ともゼロ、敦賀で男子十七パーセント・女子六パーセント、洲本男子七十七パーセント、女子は九十二パーセントが「使う」または「使わないがよく聞く」という結果であった。

○ヤツス(女の化粧すること) これも三市で調査した。福井はゼロ、敦賀の女子は百パーセント、洲本は男女とも「使う」「聞く」はわずか七パーセント。もともと女性に関することばだから女子が使うのは当然としても敦賀の女子に多く洲本に少ないのは大阪弁というより京都弁に近いのだろうか。

クワ・グワの音



徳川宗賢編「日本の方言地図」(中公新書)より

○ウツクシ(奇麗になる。江戸でうつくしと言われぬことをいう)兵庫東北部の但馬地区で、「うつくしい」が一般的で、掃除の後も、花もうつくしい。「きれい」はそれよ

りも程度の甚しいを言うとのことであった。この註によると江戸では「きれい」、大阪では「うつくしい」が当時一般的だったということになる。

『新撰大坂詞大全』は、先の東条氏の文にあるように大阪人

によるものであるため、当時の方言に対する意識からも特別の

ことばというようなことからか、卑語・隠語めいたものが多い。「顔」をオカという逆語。「どたまとは つむりのこと」「どんばらとは はらのこと」とは「頭」のことをいうのも「どたま」、「腹」のことをいつても「どんばら」と言うように見えるが、これらは卑語に違いない。「浪」で「どたま」は「悪たへにいふ言葉、江戸で云あたま」とある。しかし、すべてが卑語・隠語というわけではない。

以下、「大」の語彙について見る。

○イレル(酒を呑むこと) 現在、「酒をイレル」とは言わな
いが、「お前、朝から酒はいつてんのか」のように、「はいる」と言う。

○イケン「よろしからぬ」・イカン(同)となつてゐる。現在、イケンは中国地方、イカンは近畿であるが当時は両形があつたのだろう。

○イワイタオス(ねる) 豊岡市ではこの語形で「酒をたくさん飲む」「散財する」の意で使うということだがこれと関連あるのだろうか。

○インダ(悪くなつた) 洲本市で「調子がいんでる(調子が悪くなつてゐる)」などと使うとのことだつた。

○イジカメル(ものを盗る)・イガミ(悪もの)となつてい

るが、徳島で物を盗ることをイガメルと言う。また、イガミは「悪者」というより、性格的にゆがんだ者という意で使う。

○ロヲオス(いねむる) 眠ることを「櫓を漕ぐ」というが、当時は「押す」だつたようだ。

○パラス(安く売る) 現在のばら売り、と意味的に通じるものか。

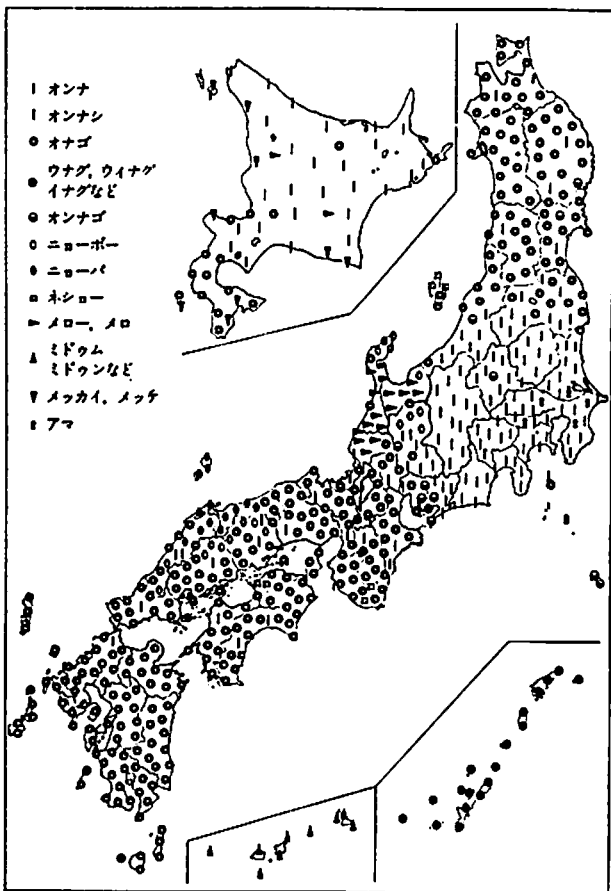
○ハリ半(さつまいも)「栗」即ち、「九里」に遠慮して「八里半」としたものの。「栗(九里)よりうまい十三里(さつまいも)」ということばがあるが。

○ホタエル(狂う) これは先に記したように両書に出ている語であるが、「浪」では(江戸という狂う・冗談)となつてゐるから「冗談で、面白がつて暴れる」の意だろう。それが「大」で(狂う)とだけあればその意味の解釈が難しくなる。○ヘタカル(脆く) 洲本でハタカル、豊岡でヘタルという。ヘタカルから変つたものだろうか。

○ドガチャガ(とりまざる) 洲本で「とりまぎれること」を「がちゃ」と言うらしいが、それに接頭語(卑)のドがついたものか。

○ワタツテミル(言うてみる) 洲本・豊岡でアタツテミルという。「渡る」と「当る」の意だろうか

おんな(女性)



徳川宗賢編「日本の方言地図」(中公新書)より

○ツケタ(しそこなう) 豊岡・大阪で「味噌ツケタ」の形で
 使うが、単にツケタでは使わない。

○ナゲル(物を安く売る) 現在、「ナゲ売り」の形でなら使
 うが、このように動詞としては使わない。

○ナミ(念を入れない)「念を入れない」というよりも「一
 般的・普通・普遍的」という意味になってきた。

○ナイモノ食オウ(無理を言う) 現在では「無いものねだ
 り」の形になっている。

○アツイ(臆せぬ) この形のままでなく「面の皮が厚い」という。

○アメ(たぶらかす) 洲本・大阪で「あめさす」の形で使う。このように、ツケター味噌ツケタ。ナゲルーナゲ売り。アツイ一面ノ皮がアツイ。アミーアメサスのように語が添加する形のものになっている。

○メロ(女) 徳川宗賢編『日本の方言地図』(中公新書)によるとメロー・メロは石川県・福井県にある。大阪は「おなご」である。江戸時代大阪にあった形が現在北陸の方に行ったことになる。へ一五〇ページの図参然

○エイシュ(分限者)「分限者」即ち「金持」のことを洲本では「ええし」、豊岡は「ええしゅ」となる。

○ピタ(銭)「ピタ一文無い」「ピタ一文出さない」はあるが、ピタを直接金銭の意では使わなくなった。

○ピンシユウ(貧乏) 豊岡でこのままの形で使う。

○モミナイ(良うない) 洲本は「もみない」、豊岡は「まむない」となり、むしろ、「味がまずい」の意で使うことが多い。

○モサ(場馴れぬ人) 現在は、「場馴れた猛者」の意では使わうが、もとの「馴れぬ人」とは別語だろうか。豊岡では「もさつとした人」の意というからもとの意に近いのだろうか。

○セビタ(物盗む) 徳島で「せびった」という。

三

この両書の語彙が現在どのように使われているかをみた。

平成三年三月から八月にかけて、大阪市と近畿周辺域兵庫北部の豊岡市、淡路島の洲本市、四国の徳島市で稿末に掲げた各氏に「使う」「自分は使わないがよく聞く」「使わない・知らない」で答えて頂いた。面接により一語一語につき答えを得た。「浪」六六九語、「大」四二七語、計一、〇九六語。

結果を整理するに当り品詞別にした。名詞・動詞・形容詞・形容動詞・副詞・助辞(助動詞・助詞・接頭接尾語)と「名詞+動詞」とした。「名+動」とは例えば、ジョウラクム(あぐらかく)「アグラ」か「ジョウラ」か、「カク」か「クム」か、名詞部分と動詞部分の両方に問題があるもの。これに対して、「何デイ(物をたずねる)」は「何」よりもデイの部分だから助辞にするなど。

なお、助辞のうち「浪」には助動詞・助詞・接頭接尾語すべてにわたってあるが、「大」の助辞は助動詞・助詞はなく、接尾語が三つだけであった。

品詞に分ける際、セツヨウ（かわいそう）のセツヨウの使い方がわからないから意味から形容動詞にした。メンドイ（面倒）も、「世話・手数」の意なら名詞にした方が、「迷惑」の意なら形容動詞にした方がよいかと思ったがこれは形容動詞にした。同様、陽気（賑やか）となっているのも意味から形容動詞にするなど用法のわからないものは意味によって品詞をきめた。その結果は次の通りである。数字はすべて語数である。

この「表」で両書的全語彙を品詞別の七種に分けた。

「四地点共通」は大坂・豊岡・洲本・徳島の四地点とも「使う」「自分は使わないがよく聞く」と答えたもの。この「聞く」は各地点ともごく僅か（大坂の「浪」全語彙のうち四語）であったので「使う」の中に入れてしまった。

「大坂」の「計」四二〇は大坂で「使う」もの、その下の（ ）は「四地点共通」を除いた数である。

「四地点共通」のほかに「三地点共通」「二地点共通」もあることは言うまでもない。

まず、「大坂」の使用語、「浪」の四二〇語は全語彙の六三パーセントであるのに対し、「大」の一六〇語は全語彙の三七パーセントであることから両書の内容の差がみられる。

「二地点共通」のうち、洲本・徳島共通を見れば、「助辞」

〈現在の使用状況〉

〔新撰大坂詞大全〕

品詞	地点					
	全語彙	四地点共通	大坂	豊岡	洲本	徳島
名詞	188	31	57 (26)	56 (25)	65 (34)	44 (13)
動詞	156	31	66 (35)	62 (31)	62 (31)	43 (12)
形容詞	50	13	19 (6)	22 (9)	20 (7)	17 (4)
形容動詞	6	1	1 (0)	2 (1)	2 (1)	1 (0)
副詞	5	2	5 (3)	5 (3)	5 (3)	2 (0)
助辞	9	7	9 (2)	7 (0)	9 (2)	7 (0)
名+動	13	2	3 (1)	2 (0)	2 (0)	3 (1)
計	427	87	160 (73)	156 (69)	165 (78)	117 (30)

〔浪花聞書〕

品詞	地点					
	全語彙	四地点共通	大坂	豊岡	洲本	徳島
名詞	374	103	201 (98)	172 (69)	158 (55)	147 (44)
動詞	122	52	91 (39)	69 (17)	63 (11)	66 (14)
形容詞	57	25	42 (17)	35 (10)	34 (9)	30 (5)
形容動詞	14	7	9 (2)	11 (4)	10 (3)	8 (1)
副詞	53	25	46 (21)	41 (16)	35 (10)	29 (4)
助辞	36	9	24 (15)	14 (5)	20 (11)	20 (11)
名+動	13	4	7 (3)	5 (1)	6 (2)	6 (2)
計	669	225	420 (195)	347 (122)	326 (101)	306 (81)

「何ジャ知ラン(何だか知らん)」などがある。指定(断定)助動詞は東山陰の豊岡は「だ」、大阪の現在は「や」で、徳島は「じゃ」、洲本は「じゃ」と「や」の併用地域であるがこのように慣用的なものに残る。「なんじゃ、かんじゃ文句ばかり言う」のようなものは残り、単に「誰じゃ」などはなく「誰や」になるなど。

また、豊岡は一音節をのばして二音節に言う習慣がないのに対し、洲本・徳島で「子」をコウとなつてゐるのはこの長音とみて「使う」に入る。

洲本・徳島共通には土地柄、魚名のものもある。サイラ(さんま)・キスゴ(きす・魚)・また、ウオヤ(さかな屋)も共通で豊岡にはない。

「大」の助辞は先に記したように助動詞はなく接頭語「ドー(ド氣違イ・ド盗人・ドシツコイ)」と接尾語「ガル(賢ガル)」「ガテラ(両用に使うこと・歩きガテラ)」などである。

両書とも大阪方言を記したのだから「大阪」で使用語が多いのは当然だが、協力頂いた眞野氏が港区の方で大阪市でも南の方、岸和田市の方では使うと答えたものもある。ヘゲタレ(あほうのこと)「大、的(江戸でいう「あれ」又「彼」なり、ときとも云)、ヘキル(仕切る)」「浪」などがそうである。

大阪市中使わなくなつて他の三地点で使うものもかなりあるが、ゲンゲ草(れんげ草)、ホネ正月(正月二十日)、飛アガリ者(ひょうきん者)、ワゲ(まげ髪)、ヨタンポ(生酔い・よっぱらい)、後宴ノ日(節句、月見などすべて物日の翌日を云)「浪」など。

大阪方言の動きをみるものである。

本稿の為に協力頂いた方は次の通りである。両書一、〇九六語の長時間、深く感謝申し上げる。

眞野展一(男・昭和一七年生まれ) 大阪市港区

宅見幸男(男・大正九年生まれ) 豊岡市

佐東吉行(男・昭和一〇年生まれ) 〃

三宅アイ(女・大正九年生まれ) 〃

柳 圭吉(男・昭和八年生まれ) 洲本市

大津 衛(男・昭和一五年生まれ) 徳島市

本稿は、平成二、四年度文部省科学研究費補助金、一般研究C(研究課題「近畿周辺域方言の史的・社会言語学的研究」)による調査の一部である。